

地名から災害を読み解いた市井の研究者

「地名でわかる 水害大国・日本」

この小見出しは書名でもある。

筆者はその本を著者から頂いた。以前「日比谷梁山泊」という会（ロナ禍で休会中）があり、著者の楠原佑介氏は、月一回の例会で重鎮として意見を述べておられた。はじめてその会に参加した折に、名刺代わりにと、本書を恵贈してくださった。楠原氏は京大の史学科（地理学）を卒業され、出版業界でも活躍されたが、地名についての自著も多い。踏査を基本とされ現場を押さえて著されている。本書は2016年に祥伝社新書として出版された。『地名でわかる水害大国・日本』という題名は国民としてあまり有難くない看板だが、集中豪雨、ゲリラ豪雨、線状降水帯などの用語が常用される昨今、本書に例示されている地名の当該地には、大雨や水害など、古来から周知の災難であったことが明らかに見取れる。

どの清流であったが、台風などになると丸太や樹木根などが流れる茶濁色の暴れ川と変じた。眼の前の道路の下の畑まで激流が押し寄せ、子供ながら恐怖心を覚えた。その様子はいまでも目に映る。本コラム(22回目)の取材で伺った長野県須坂市の笠鉾会館という博物館には、代々の須坂藩主が水害対策のために財政を振り向けてきた歴史が展示してあった。この地の周辺では、2019年の台風19号の折に千曲川が増水し新幹線車両を呑みこむ大水害があった。その辺りの地名は、赤沼や長沼と名付けられている。

各地で見られる、歴史を隠した「美名」

間責任を問うてもいい。各所で見られる、歴史を隠した「美名」

埼玉県越谷市を走る東武鉄道の駅に「せんげん台」があり、筆者も隣の春日部市に住んでいたことあり、よく利用していた駅である。その住居表示は、千間台であるが、元々は千間堀という湿地帯を埋め立てて、現在の駅名にしたものである。著者の楠原氏も埼玉県在住で詳しく書かれているが、「せんげん台」も大雨で冠水することが多く、典型的な窪地を宅地開発した場所である。都市開発のために当該地の履歴が消されているが、大雨のときには排水が十分で冠水して正体を現す。

に付けていた。氏は、100年ほど前の明治14年の古地図から昭和7年、20年、40年の2万5千分の迅速図を比較し、時代変化による現場の土地利用の変化の推移をとらえて、水害現場と照らし合わせた。その結果、昭和49年の水害が多摩川沿いの決壊箇所は、水路が分流したり合流したりして形成された「網目状流路」の真ん中に当たることが検証されている。この災害では、電鉄会社や地元市、また河川を管理する国も関わる行政責任が問われた。

も説明しているが、ここでは「高須」という地名について触れている。流れの蛇行をショートカットしたことに水難の原因があったと述べている。「高須」は何度も決壊して押し出された土砂が堆積して高くなった所との解釈だ。須崎なども使われる。その折に、地名は、その土地の謂れや歴史があり名付けられている。漢字に当てはめられる場合には印象のいい新名になったりする。その折に、その謂れや歴史が消えてしまう時もあるが、水害など「いのち」に関わることは、伝承とともに継承すべき地名もあることを、本書は教えてくれる。これも、大事な「地元力発見」ではないだろうか。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事

筆者の経験振り返ってみる。中学校まで暮らしていた田舎の家の前は、日常時は川幅が3、4段は

地球温暖化による自然の変化もある悪夢」。楠原氏は、学生のころ「地図作図学実習」の講義で、「迅速沼地であったところも埋め立て」という地形図し、住宅地として販売の都合から「〇ヶ丘」などと命名されている

判別する手法を身

は「巡る川」のことであるとも、ほかの背景や例を挙げて説明している。

他に楠原氏は、利根川支流の小貝川の決壊について

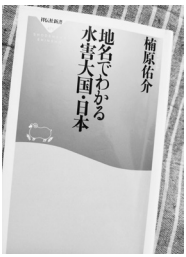
地元力発見!!

25

佐藤建吉 「洗楓座」代表



上) 楠原佑介氏
左) 『地名でわかる水害大国・日本』
(祥伝社新書)



「地図作図学実習」の講義で、「迅速沼地であったところも埋め立て」という地形図し、住宅地として販売の都合から「〇ヶ丘」などと命名されている判別する手法を身